

若い会員と「改革」

JSCA会長・常木康弘

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■ 構造家への第一歩

郷里の会津には城跡の美しい石垣があった。小学生の常木康弘さんが「建築」に目覚めたのが、それを見たのがきっかけという。石垣から建築をイメージできる感受性が備わっていたのだ。高校生になってもその想いは変わらず、東京工業大学への進学と続く。大学は兄が通っていたことから自然に迷いなく選んだが、専攻は当然「工学部建築学科」。鉄、鉄塔を中心に研究に明け暮れる。

「研究者になるより実践で設計がやりたかった」。日建設計へは難関を見事に勝ち抜き…というより研究室の先生に勧められて試験を受け、他と比較することなく入社。決断力と実行力、芯の強さが信条の常木康弘さんはこの頃から変わらない。

その頃日建設計の役員であり、ポラ五反田ビル(1971年)で日本建築学会賞作品賞を受賞された林昌二さんが面接官だった。「林さんに何を聞かれたか覚えていない」という。常木さんにして同じ大学出身の偉大な先輩を前にしての緊張感だったのか。または、何事にも動じない精神からだったのか、1979年に入社して活躍が始まります。

■ 日建の中核として

当時日建設計では、入社2年生の人に設計を任せられる機会があった。常木さんは全館を日建で借りることが決まっていた前本社の設計を任されたのだった。クライアントが会社という訳。自分の時間を削って「手書きで図面を描いて」格闘したことは想像に難くない(今は昔の勤務体制だ…)。その甲斐あって「チャレンジングな建物になった」と。

RC造だけを3年あまり、大学で研究した鉄骨を「まだ担当していません」と自己申告して、与えられたのは製鉄工場の設計。喜ぶべきことに、その後の3、4年間で鉄骨で工場の設計。構造がそのまま形となるのが工場建築であり、コスト管理や大伽藍を支える鉄のディテールなど、構造設計者の経験としては最高のものであった。やり甲斐と勉強にはなったが、と同時に表舞台に華やかに出る建物ではないから、ストレスも溜まったのです。

若い優秀な社員を修行させるのには意味があったようで、次はいきなり高層建築だった。港区庁舎が45m超えの住友ツインビルへと。NEC本社ビル(NECスーパータワー)を担当したのは28歳。本人は「人が上についての担当ですから…」と謙遜する。が、一番頭脳がクリアな年代になされた実績は見事というしかない。現在、日建設計取締役常務、エンジニアリング部門統括の要としての活躍は言うに及ばず。

■ JSCA 法人化30周年を舵取り

「構造技術者が環境変化にどのように取り組み、進化しなければならないか。構造技術者に求められている構造性能や構造デザインを、自らが考え社会に提案していかなければならないときが来ている」(会長新任の挨拶より)。JSCAの「改革」がテーマである。若い技術者を取り込むには避けて通れないコンピュータとの付き合い方。そして、人間がコンピュータに使われないためには何が必要かを模索する。「それは経験に裏打ちされたカンを身につけることだ」と言う。「今後30年先はわかりませんよ」と念を押しながら語るのは、節目の30年を迎えたときに、奇しくも会長となった自らに与えるプレッシャーである。若い技術者よJSCAに来たれ!「構造技術者の心に設計の楽しみを

教えたい」。覇志堂の構造設計者と意匠設計者の融合はあるかの問いには、「あるレベル以上の技術者は既に融合している」それは社内でも実証されていると自信を持って答えた。

スポーツで調整されたシャープな身体に宿る技術者としての誇りを、常木会長は百万両の笑顔で表現した。

